

日光御成街道道中記随感

—「奥の細道」の「日光」と「白河」とをめぐって—

横山邦治

一

已三月廿日 日出、深川出船。已ノ下剋 千住ニ揚ル。

一 廿七夜 カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余。

一 廿八日 マヽダニ泊ル。カスカベヨリ九里。前夜ヨリ雨降ル
午ノ下剋止。此日栗橋の關所通ル。手形モ斷モ不入。

二

にひかれる芭蕉の心に何のかげりも与えていないようである。一方、「曾良随行日記」には、栗橋の關所を過ぎたことが記録されている。記録と文学作品との違いなのであるが、この栗橋の關所とはいかなるものであったろうか。

芭蕉の奥羽行脚に従った曾良の「曾良随行日記」の日記本文の冒頭。「不二の峯」や「上野谷中の花の梢」を、西行の歌「かしこまるしでに涙のかゝるかな又いつかはと思ふ心に」八山家集Vを踏まえてではあるけれど、「又いつかはと心ぼそし」と旅立ちの感懷を述べ、千住に舟を捨てて「前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝく」と、いつてみればやや大げさに離別の情を述べている「奥の細道」の冒頭と好対照をなす記述である。

必要最少限の事実を記すれば足りる記録と、時に恣意的に情を述べたことを許される文学作品との違いが、ここに如実に示されている。

ところで、芭蕉は、絵空事である草加の宿り（注一）から、一挙に室の八嶋へと筆を飛ばしている。途路の景色は、歌枕の室の八嶋

昨昭和四十九年八月廿九日、雨中に栗橋の宿場に着く。同行男女四名、似て非なる行脚人たちであるが、芭蕉たちも雨中に栗橋に来往したことを想起する。増水した大利根の濁流は、見る見る川幅一杯にひろがり、昔日の交通はどうであったのかと気になる。洪水に備えて高い土手が築かれた兩岸に、今は上・下線の大きな橋がかかっている。その栗橋側の河畔に、関所跡を示す小さな石碑が立っている。

民宿した家の、親切な女主人の紹介で、栗橋の關所の番士であった子孫という人に会って色色と説明を聞く。河畔の土手下で、古い番士の家が数軒並んで建っていたところのようであるが、大半改築されて、一部門がまえなどに面影を残すだけの家並みであった。そ

のうちの一軒の十三代目だとかいわれる足立家の当主の話では、栗橋の関所は、奥羽街道・日光街道両道が合流して、江戸へ入る前の関所として、東海道の箱根の関所並みの出入鉄砲を監視する重要性を有した関所であったという。化政期以降の記録類が現存しているが、それを見ると相当嚴重な関所であったようである。

幕末頃の刷りと思われる一枚刷の版画を見せてもらったが、それによると、川中に舟を並べてその上に橋けたを通して通行の便をはかり、その栗橋側の河畔に関所があり（当然今見られるような土手は存在していないようである）、その関所を通過すれば街道の両側に旅宿が櫛比しており、想像をたくましくすれば、そこで飯盛女が袖を引いていたであろう。増水した時は、橋の真中を切り離して、両河畔に舟と橋板をつなぎ止めておいたようで、旅人も当然大井川の川止めのごとき情況に置かれることもあったと思われる。島田の宿のごとく、栗橋の宿場は当然繁昌したはずであり、現今過疎現象が見られぬでもないその町並みにも、往時の盛業をしのばせるものがある。

吉田東伍博士の「大日本地名辞書」に、「新風土記云」として、栗橋宿は江戸より十四里の行程なり、慶長年中下總国栗橋村の民、池田鴨之助、並木五郎平と云ふもの、伊奈備前守忠次の指揮によりて、新に開墾せしが、民家次第に増加し、遂に宿並をなせり——略——当所次第に繁昌し——略——民戸街道の左右に櫛比し、宿驛及び諸商をなして生業とす、又一六の日市を開き、穀物其外諸品を駕けり、渡船を房川渡と云ふ、利根の渡にて、川の向は下總國中田宿なり——略——日光社参の時は、爰に船橋を架し、堤上に御茶屋を構ふ、こゝより望めば、向は中田の宿の松間より、微に粉壁

の見ゆるは、古河の城牆なり、又富士、筑波、日光の三山、三方に屹立し、真に一名区なり、関所、利根川堤上にあり、其置かれし年代詳ならず、見張番所を構へて、往來の旅人を改む、是を房川渡、中田の関所と唱ふ、——略——と記す。しかし、「松屋筆記」巻十二の十九に、

栗橋 武蔵国埼玉郡に栗橋といふ驛あり刀根川にのぞみて東に渡れば下總国結城郡中田の驛也此くりはしといふ地名はいにしへくり舟などのさまに舟橋をまうけしゆゑなるべし梅花無尽蔵三の上巻に十一日出二柿崎二大平濱路黒井中濱之間有河兩岸挿柱張二大綱二渡者皆転手而遣舟号曰二転舟一とありこれらに似たるものなるべし——略——

ともあって、渡河の方法が今少し不分明であるけれど、版画に見た幕末渡河の様子と、日光社参における渡河の様子が大よそ一致しているから、芭蕉主従が渡河した元禄時の様もこれらと同様であったであろう。当時の渡河の方法としては、決して珍らしいものではない。かつたのであるうけれど、主従とも一言半句触れるところはない。

そして、関所の在り様も今一つ不分明であるけれど、奥州街道と日光御成街道が合流して江戸に通じている要所であり、阪東太郎という大河に面して人改めに最も便なる場所であるから、番士の末孫の説かれるところは真に近いといえよう。化政期以降の日録の記録によると、日日の特記事項が刻明に著録されていたから、それは関東御郡代に報告されていたようであるから、箱根の関所並みであったかどうかは別として、相当嚴重な関所であった可能性が強い。曾良が「手形モ断モ不入」とわざわざ記したのは、表向きのいかめしさに比して簡単に通過できたからこそその記録、曾良自身が他の関所で

経験したであろう例に比しての意外感からの記録と解してもいいのではないだろうか。これだけの構えをした関所でありながら、手形も断も必要とは……というのである。一方、関所役人の側からいえば、僧侶ではないが剃髪した宗匠という行乞の主従二人、出女入鉄砲とは全く無縁であつたし、まさか密偵と疑われることもなかつたであろうから（もつとも、江戸から出て行くのであるから、関東御郡代支配下の当関所役人としては、將軍様の密偵大歓迎である。）警戒すべき何ものもなかったのであつたらう（注二）。

いずれにせよ、栗橋には関所が存在し、曾良にとっては記録さるべきものとして存在したのである。が、芭蕉は、一言半句もそれに触れることをしなかった。再度いう、それは記録と文学の相違であつて、他の何ものでもないのである。しかし、目を転じて、存在の在り様は異なるけれども「関所」ということにおいては同じ白河の関の「奥の細道」の記述を見ていくと、文学する芭蕉の姿が鮮明に浮びあがつてくるごとくである。

三

心もとなき日数重なるままに、白河の関にかかりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしことわりなり。中にもこの関は三関の一にして、風騷の人、心をとどむ。秋風を耳に残し、紅葉を俤にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲き添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣装を改めしことなど、清輔の筆にもとどめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに関の晴れ着かな 曾良

白河の古関趾で、芭蕉は以上のような感慨を記している。曾良の記録も、白河の関前後は詳細であるが、記録以上に出るものではない。四月廿日の条に、

一 関明神、関東ノ方ニ一社、奥州ノ方ニ一社、間廿間計有。両方ノ門前ニ茶や有。小坂也。これノ白坂ヘ十町程有。古関を尋て白坂ノ町ノ入口ヲ右ヘ切レテ旗簾宿ヘ行。廿日之晩泊ル。暮前々小雨降ル。

と記すのみ、廿一日の条に、白河の関などにかかわる等舩の口伝を記しているが、それも記録以上のものではない。要するに、曾良の記述態度は、芭蕉の忠実な随伴者として記録するのみで、栗橋の関所を通り過ぎた時と全く同じものであつたといえよう。むしろ、「手形モ断モ不入」と記すところに、曾良は曾良なりに近世人的感懐を示していると言えいえるのである。

「や年も暮れ、春立てる體の空に、白河の関越えん」として旅立つた芭蕉にとつてみれば、その白河の古関趾に立つて「旅心定まりぬ」という、「奥の細道」の旅を決定的に意味付ける言を記すのも、記録者曾良とは立場が違うのであるから当然であつたらう。ただここで注目したいのは、「日数重なるままに」と記す点である。これは、角川文庫本「奥の細道」の脚注を利用すれば、

白河の関の古歌に多く「日数」をよみ、『類船集』にも白河の関の寄合として「日数ふる旅」をあげる。

ということになる。即ち、古歌もしくは俳諧の類型的発想を基盤として、「旅心定まりぬ」と記しているのである。さらに、平兼盛の歌「便りあらばいかで都へ告げやらむけふ白河の関は越えぬと」八拾遺集Ⅴをふまえて、「いかで都へ」と便り求めしことわりな

り」と古人の感懐に同意する。都といえ、京都のことであるは当然、平兼盛も京の人である。都を發つて、美濃路を下り三河の八橋で「から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしぞ思ふ」と感傷し、さらにはるばる東海道を下つて、江戸の角田川の河畔に立つて「名にし負はばいざ事とはむ宮こ鳥わが思ふ人はありやなしやと」と詠んで「舟こぞりて泣く」へ伊勢物語Ⅴいたという古き都人にとって、白河の関はまして「日数」という語を詠み込みたくなる辺土であり、「便り求め」たくなるのも「ことわり」というべきであつたらう。しかし、芭蕉は、江戸は深川・芭蕉庵に一応定住していた人である。江戸の深川を發つて一ヶ月、しかも千住で一週間ばかり知友と別れを惜み、黒羽で浄坊寺圖書や鹿子畑善太夫の歓待を受けて数日の滞留を樂しんでの一ヶ月で白河の古関所趾に立つたのである。伊賀の人芭蕉にとって、深川の芭蕉庵とて仮の宿りであつたであらうが、一応江戸の人となっていた芭蕉であつてみれば、都人たる昔人より異なる旅情が白河の関趾に湧いて然るべきであつた。近世において、江戸からの白河の古関趾は、決して遠い旅程ではなかつたはずなのである。その白河の古関趾で、「旅心定まりぬ」と記す芭蕉の心情は、都人たる古人の心情を追体験しようとする姿勢の上に築かれたものといえよう。

そうした心情を抱く芭蕉は、元禄盛時に生きた人でありながら、眼前の白河の古関趾を直視してはいないようである。「此関は三関の一にして」という、この「三関」に関しては諸注あるけれど、岩波文庫本「奥の細道」注に従つて「羽前の念珠（ネズ）、磐城の白河、常陸の勿来（ナコソ）を東国の三関という」とすれば、この三関全て元禄の盛時には現実的機能を有する関所として存在しないも

の、言つてみれば、歌枕としてしか記録されていない関関であつた。そしてその古関の一つに立つて、芭蕉は「秋風を耳に残し、紅葉を佛にして、青葉の稍猶あはれ也」という。江戸に比べると春のおそい磐城の国の旧暦四月廿日は、濃緑の青葉若葉が全景を覆い、むせるような芳香が旅人をつつんだに違いなかつた。にもかかわらず、芭蕉は、

都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の関 能因（後拾遺集）
の古歌を縁にして秋風吹く白河の関を、

都にはまだ青葉にて見しかども紅葉ちりしく白河の関 頼政（千載集）

の古歌に依つて紅葉に輝く白河の関を、それぞれ想起し、それによつて改めて眼前の青葉が一層美しいというのである。満開の卯の花や路傍に咲く茨の花を見て、

白河の関の秋とは聞きしかど初雪分くる山のべ道 通光（夫木抄）

の古歌を想起し、花の白さによつて「雪にもこゆる心地」がしたとする。眼前の白き花花は、初雪に転置されてしまふのである。

現実存在し機能していた栗橋の関所を黙殺して通り過ぎた芭蕉は、現実に機能しない白河の関の古関趾に立つて、「風騒の人心をとど」めたという古き幻影を追つて感動するのである。清爽の氣に溢れていたはずの青葉若葉や目に染み入るばかりの卯の花や茨の花を眼前にした芭蕉は、古歌を縁にして想起される秋風・紅葉・初雪という伝統的に類型化された景色に等置することによつて、「猶あはれ」也と陶醉境に入るのである。「猶」という語は、そう考えることによって、初めて生きてくるのである。いずれにせよ、こ

した芭蕉の目は、芭蕉の古きを慕う心情は、最早眼前の景を直視していいないともいえるのではないであらうか。ここに、芭蕉の一つの姿を見いだすのである。

四

栗橋の関所趾の石碑を後にして、私も昭和元禄のキャラバン隊は、大利根の橋を渡って、一路日光御成街道を北上する。古河・間々田・小山・新田・小金井・石橋・雀宮を経て宇都宮へと着く。その間、昔日の面影はほとんど残っていないのが実状で、近代化された道路を我もの顔に先行する自動車の排気ガスに悩まされながらの行脚である。

宇都宮からは、徳次郎・大沢・今市と昔日の杉並木が各所に残っており、殊に大沢からはバス道路が時に杉並木と交交したり並行したりするけれども、昔日のままの杉並木を歩くことができる。薄曇りの木の下闇に、清涼のオゾンを胸一杯にして歩く、近世人の健康な旅を思う。

今市では、例幣使街道と御成街道とが合流し、昼なお暗い古杉の聳立する合流点には古祠が立っている。例幣使街道を経て今市に着いたはずの芭蕉主従の姿を、この路傍に想定する。合流点から今市の町並みが続く。近代化しつつある町並みの店頭で、お年寄りに近付いて本陣趾のことなどを聞いたけれど、もはや身近なものとしては記憶されていない。たまたま見せていただいた地方雑誌に載る明治初期の写真を見ても、その変貌は激しく、現状と照合するさすがとでない有様。報徳二宮神社に参詣して、二宮尊徳の終焉の地たる

ことを知る。晩年の尊徳は、今市にあって日光周辺の産業振興に尽力していたようで、今もその遺徳がたたえられている。

今市から日光までは、自動車道が別に着けられており、人一人通らないといっている杉並木を進む。昔日の面影を如実に伝えるこの道は、芭蕉主従もたどったはずである。元禄の盛時に、果して現今見られるほど巨大な杉並木に育っていたかどうかは疑問だけれど、神君東照大権現様の奥つ城どころに程近き道とて、近世人にとって、敵肅凛烈の氣に満ちた道筋であつたろう。堀田正綱が杉並木を成林の見込みが立って寄進したのが慶安元年であるから、元禄年間には相当の太木となつていたはずで、現今のごとく昼なお暗きという状況とは異なっていたとしても、それ相応の美観と威圧感を備えた杉並木であつたに違ひなく、近世人にとって尚更に神域近しの感を抱かせるものであつたろう。

東照宮——私どもには、異様に生々しくて、むしろ反発をのみ感じさせるものであつたけれど——を拝して後、芭蕉主従にあやかって含満淵と裏見の滝とを見巡る。含満淵は、東照宮から程遠くないけれど、見物の人が皆無だったのはどういうことか。東照宮見物の人波を見た目には、異常ともいえる静寂である。丁度台風一過の余波たる豪雨の後という好条件もあつたからであろうが、私どもの見た含満淵は、豊かだし、清冽ともいふべき澄んだ水が激流となり、奇岩怪石をかねて飛沫となり、しばし茫然と見入るにふさわしい自然の造り出した絶景というべきであつた。東照宮という人工の極を見た目にとって、正に目を洗われる感があつた。

足を痛めた同行四人、裏見が滝にはタクシーにする。運転手さんが、裏見の滝には昔日の面影皆無と言い、さらに、二荒山を修験の

山として開いた勝道上人が発見した滝には、華嚴滝とか寂光滝とかのごとく仏典・經文の文句が付会されているが、それ以降に発見された滝には、霧降とか白糸とか裏見とかという具合に、形状などによる命名がなされているという話もしてくれた。タクシーを降りて、しばらく裏見の滝への険しい山道をたどって行く。しかし、滝を眼前にして、増水によって櫓橋が流失しており、滝壺の前の渡河が不可能で、石不動の存在など確認するに至らなかった。流勢によって滝の流出口が変形し、昔日のごとき裏見といったことは不可能だというが、それも確めることができず、ただ遠望に終ってしまったのは心残りなことであった。が、東照宮の人工の美に對置しながら、むしろそれを大きく包んでいる自然の美の壮大さを知るのである。

五

粕壁に一泊して、前夜よりの雨が止んだ辰上尅宿を出た芭蕉主従は、栗橋の関所を通り過ぎて間々田に一泊、それから小山を経て木沢というところから御成街道を外れる。歌枕の名所室の八嶋を訪れるためである。そして、鹿沼一泊、さらに例幣使街道を日光へ向う。曾良の日記には、日光參詣前後を、

四月朔日前夜ヨリ小雨降。辰上尅、宿ヲ出。止テハ折ニ小雨ス。終曇。午ノ尅、日光へ着。雨止。清水寺ノ書、養源院へ届、大衆院へ使僧ヲ被添。折節大衆院客有之、未ノ下尅迄待テ御宮拝見。終テ其夜日光上鉢石町五左衛門ト云者ノ方ニ宿。巷五式四
同二日 天氣快晴。辰ノ中尅、宿ヲ出。（一里程西北）ウラ見ノ滝・ガンマンが淵見巡、漸ク及午、鉢石ヲ立、奈須太田原へ趣。——略——

と記す。この記録によると、日光の東照宮参観のために、江戸は浅草の清水寺の紹介状を持参しており、東照宮参観が当初から旅の企画の中に入っていたことが判る。そして恐らく特別に東照大権現宮の拝観を許されたものと思われるのである。栗橋の関所を通った芭蕉主従を、行乞の主従二人という表現で評したけれど、とはいえ行方定めぬ流浪の行者というのではなかった。四月二日の曾良の日記に、「同晩玉入泊。宿悪故、無理ニ名主ノ家入テ宿カル」という、一般的に想像されている「奥の細道」の芭蕉像とは異なる記録が残っていることでも示すように、彼等は彼等なりに極めて用意周到な旅行計画を樹ていたのであり、必ずしも乞食行でなかったのである。そして、日光にたどり着いたのは、黒髪山という歌枕に心着かれたということもあったであろうが、伝統的和歌の材としては価値のない日光東照宮拝観をも、当初から権威ある紹介によって計画されていたからである。そして、その目的を達した芭蕉は、

あなたふと木の下暗も日の光
という句を残すのである。

「曾良書留」に見られるこの句は、日光到着以前に成案としてあったのではないかと推測されており、極めて評判の悪いもの、「日光山に詣」と前書されている「もよ草」所出の芭蕉の真蹟に「あらたふと木の下闇も日の光」とあるのが、行脚当時の初案かとされる。上五のうち一字の違いであるが、「あらたふと」というのに、一層真率な感動の気持を感得するのは、私の語感に誤りがあるのであるうか。一字の違いではあるけれど、日光東照宮参観以前と以後との違いが、ここに表明されているとしていいのではあるまいか。観念的に、先験的に東照宮の神徳をたたえていた芭蕉が、直接日光東

照宮を拝すること、真底から神君家康公の威徳を讃仰する気持ちになったのではないか。これは、元禄の盛時に生きて戦乱の記憶は遠い物語としてあったにせよ、いまだ徳川封建体制の矛盾も露呈していない時代とて、平和な日本を築く基盤を据えた家康公に対して畏敬の念を抱くは当然で、近世人芭蕉にとって当り前のことである。こうした芭蕉の姿勢をとらえて云々するのは、見当外れというものであろう。(注三) この句の最終案は、

あらたうと青葉若葉の日の光

である。中七の改作で、この一句が飛躍的によくなったというのが一般的評価のようである。その論拠は、「木の下闇」という語句に天下の蒼生の意を認め、「遠国辺境の隅々までも、恩澤が届く」という極めて観念的解釈を下すに對し、「青葉若葉」という語句に芭蕉の自然礼讃の心情を最大限に読み取り、観念論から脱却した芭蕉の姿勢を肯定しようとするところにあるようである。もっとも、一般の論者も認めらるるごとく、「青葉若葉」と改作したとしても、神君家康公礼讃の意が無くなっているわけではなく、青葉若葉に照り映える東照宮の壮嚴を脳裏に描く時、一層新鮮なイメージとなつて我々にせまってくるともいえるのである。とすれば、「木の下闇」としても「青葉若葉」としても、神君礼讃の芭蕉の姿勢に変化はないといえる。要するに、両案の違いは、実感でもって自然を詠み込んだかどうかというところにあるようである。

しかし、「木の下闇」という語句に、芭蕉の実感が全くなかったかどうかということになると、疑問が生じないでもない。日光東照宮拝観当日は、曇天で小雨も時に降っていたようである。日光到着と同時に「雨止」とあるから、曇天ではあっても時に日の光が差し

て来るといふ、極めて不安定な天候ではなかったか。杉並木にあって、また神域の木立ちの下にあって、薄暗がりの中にちらりと薄日が差し込むということもあったのではなかったか。鬱蒼と茂った木の梢の間からちらりと洩れる薄日は、時に七彩の虹となって散乱し、人人に神秘的感動を与えることさえあるのである。日光参道の杉並木や東照宮の木立ちは、そうした雰囲気を作るに充分な条件を具備させているのである。ある程度腹案があったにしても、「あらたふと」と表現することによって、芭蕉は芭蕉なりの実感の裏打ちをしたのではないであらうか。

翌二日は「天気快晴」であった。宿を発って日光周辺の名所見物をしている。快晴であつてみれば、「青葉若葉」の輝かしい美しさを満喫したであらう。裏見の滝とか含満が淵のように、自然のいたづらが造り出した絶景を背景として、榛と日の光にきらめく青葉若葉を目にすると、自然讃仰の念が自ずから湧いてきたであらう。そういう体験があつて、「青葉若葉」の中七の語句がひらめき、最終案となったのだと思われる。こうして、神君の威徳を讃嘆すると同時に、日光山全体をつつむ自然の美を讃仰するという二面性を有する句が、「奥の細道」に定着するのである。

ところで、芭蕉主従は有名な華嚴の滝を見ずして、裏見の滝を見て記録していることは周知の事実である。日程の上から見物できなかったということも考えられようが、当時の人の足でいえば、裏見の滝に行くに必要な時間に一刻の余裕を見れば十分ではなかったらうか。「日光山志」巻之四(天保七年刊)に、

華嚴滝 此飛瀑は中禅寺湖水より落来る水路凡七八町流れて滝口に至る其水路も又一派の河の如く幅十間余或は七八間の所もあり
楮南湖より四五町流れ来りて板橋を架せり是を南岸橋と唱ふ長十

間許この橋は歌浜への通路なり又は足尾へ掛り上州筋より詣るもの足尾峠の頂上より岐路を過ること凡二里許の嶮を凌て爰へ来るまた本道を経て中禅寺へ詣るものは大平の道脇に左へ折て行べき平坦の小路あり凡五六町余をたどりゆきて此飛瀑の辺に至る是は大谷川の水源なり高七十五丈といふ此瀑東関第一の瀑にして滝口幅二間余滝下は人蹤のかよふ所にあらざるゆえ滝を眺望すべき所なく滝辺より二三十間程も東寄に懸崖に差出たる危岩あり藤蘿を捫て其磐の上へ下り藤蘿を力にし持て頭を延ながら飛流する水勢を窺見るばかり直下する激勢遙に下る水煙雲霧盤渦として分ちがたし略一

とあり、相当な難所であつたことは確かである。また雨後のこととて水量多く、華嚴の滝へ行く道が一層危険ということも有り得たであらうが、健脚の当代人にとって、それが見物中止の充分条件とはいえないであらう。とすれば、裏見の滝に一層惹かれる何かがあつたとしなければならぬであらう。

芭蕉は、「奥の細道」に、

しばらくは滝にこもるや夏の初め

の句を残す。夏は、夏行・夏籠・夏安居ともいって、仏徒の勤行の一種であることは周知のことである。芭蕉が訪れた当時の裏見の滝周辺の様子がどうであつたかは判らないが「日光山志」巻之三に、裏見滝 荒沢滝ともいへり久次良の大日堂より少しく行て右の方に勝示あり此所より山路の嶮を凌て西北へ廿町許ゆきて荒沢の山上に至る夫より路を左に取て尖岩を陟り右の方なる山峯を見れば危石忽に落るが如き岩下を越て滝の傍に至る茲に荒沢不動の石像有て脇に龕堂あり此所ハ滝の横手ゆゑ正面を望には滝の裏を潜り

行て向の方へ廻り見る事となり偕其滝口は盤石凡一間餘差出たる上より瀑水激流して水幅六七尺其岩石の差出たる下ハ道幅四尺許高さ六七尺あれば滝の裏を潜り透るに患ひなし誠に希代の飛瀑なり係る名勝なる瀑水を八景の内に入ざりしハうらみといふ唱へを嫌はれたる歟

とあって、石不動と龕堂の存在を明示する。珪山の「鬘籠夜話」の滝の図にも、滝の裏道のかたわらに行者の龕堂のごときが建っているように描かれていたという（注四）から、安永から天保にかけては、確実にそうしたものが存在したことは明らか、「国花万葉記」にも石不動の存在は明記するから、芭蕉當時までさかのぼって実証できる。そして、現在の裏見の滝に至る細い山路の入口に見られた標示によれば、この裏見の滝を仏道修練の場とするため石不動などを設営したのは、神君家康公の側近として勢威並ぶものなかつた天海僧正であるという。少くも、「夏」という語感が適切に感じさせる背景は、近世に入つてしつらえられたもののようであつて、勝道上人以来の山岳仏教のそれを伝えたものではないようである。しかも、時の権威者たる天海僧正が設営したものということになれば、近世人芭蕉主従にとって、また別種の牽引力を生ぜしめるものがあったと思われる。

芭蕉自身東照宮拝観のために手を尽し、神君家康公礼讃の句を前もって準備し、天然の青葉若葉の美に感応しながらも神君礼讃の念にいささかも翳りを見せないという姿勢をとっていることと、天海僧正とゆかり深い裏見の滝見物に出かけた姿勢とには、一脈相通じるものがあるのではないであらうか。時の権威には素直に服従するという、近世人としての良民的態度とでもいえるようか。このこ

とは、芭蕉をして徳川封建体制批判者であつたかどうかという、近代主義的見地から評価するのであるのなら別であるが、近世人として生きた詩人芭蕉にとって、決して不名誉な評価とはいえないであらう。

白河の古閑趾で、古人の心を心として自然を眺めて中世人的情感に生きようとした芭蕉は、同時に神君家康公を讃仰する純乎たる近世人でもあつた。一見、異質なものが同居しているごとくであるが、そこにこそ芭蕉の芭蕉たるゆえんがあるのであらう。ただ、こうした一二の事例からもうかがわれるごとく、近世人芭蕉の目は、決して未来を見つめていたのではなく、過去へ過去へと向いていくように思われるのである。

六

時代錯誤的な日光御成街道行脚の意図には、近世人の営為の一端を身を以て体験してみようということも、その一つとしてあつた。列島改造の爪跡が、古き好き姿を蹂躪し尽したかとも思われる程に変形された街道を、近代化の象徴ともいえる高慢な自動車群の排気ガスに悩まされながら歩き、草加の宿場に残る前近代的草加せんべいの手焼きに感動し、唯一の近世の遺物といえる日光の杉並木の木の下闇に立ち尽した私たち。近世人でありながら常に旧き詩歌の世界に身をゆだねた芭蕉と、街道の旧き一木一草に一喜一憂した私どもと、所詮その精神構造は同一類型のものに過ぎなかったやうである。

旧街道を探して遂に発見できず、完全補装のいろは坂を登って華

嚴の滝を見、夕暮れの中禅寺湖の冷水に足をひたして、この人工から自然への急転回に、何気なく適応している私どもである。そして、この幽邃な自然を残す中禅寺湖畔に芭蕉を立たせたらと思うことであつた。歌枕にないというので、一言半句の賛辞をも残さなかつたであらうか。

注一・「曾良随日記」により、当日は「粕壁」に宿をとっていることが明らかである。また、当代人の足として、千住から粕壁まで九里の道のりは、極めて自然な行程であり、まず室の八嶋をと志向している芭蕉にとって、草加あたりで宿をとるはずもなかったのである。が、現在、草加の町には、芭蕉が泊ったという言い伝えのある旧家が残っているという。文学が事実を作りあげたとしてもいおうか。

注二・栗橋の関所通過について、次の二例の記録に気付いた。

（寛文三年四月）二十九日丁酉蚤発ニ杉戸、致ニ幸手、暫憩ニ於栗橋驛、吏棹ニ舟待レ之、余駕ニ舫斎、又設ニ小航、受ニ僕奴十餘輩、涉ニ利根川、是武州野州之界也（癸卯子役日録）

安永五申年四月、一略一栗橋渡しは船数艘ならべ、鎖にて舟を繋ぎ土を盛あげ、左右に小松を植平地の如く相成候由、一略一（親子草）

まだまだ多くの記録が存在するはずであり、また栗橋の関所の機能についても調査研究があるごとくである。博雅の士の教を乞う。

注三・創建当時の元禄時にあって、日光東照宮は、今以上に生々しく絢爛豪華なものであつたらう。多くの識者が評されるごとく、それは決して趣味のいいものではなく、芸術的感興を抱くも

のでもない、むしろ索漠とした気持をおこさせるものである。それをしも、芭蕉は感動をもって対したのかどうか、詩人芭蕉の本音が知りたいものである。日光の結構について一言半句触れない芭蕉の態度に、その一端を知るところは僻目か。もっとも、芭蕉は、建築物の美について言及すること極めて稀である。

注四・角川文庫本「奥の細道」発句評釈、参照。

（本学教授）